

Title	子音の調音点と調音力の関係 : デンマーク語の場合と一般音韻的問題
Author(s)	間瀬, 英夫
Citation	大阪外国語大学学報. 42 p.109-p.120
Issue Date	1978-03-15
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80715
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

子音の調音点と調音力の関係

—— デンマーク語の場合と一般音韻的問題 ——

間 瀬 英 夫

The articulatory strength of consonants

—— a case in Danish and a general problem in phonology ——

Hideo MASE

Two matters will be discussed concerning the correlation between articulatory places and articulatory strengths of consonants: (1) that the standard Danish [b] (/b/) is not spirantized as are [ð] (/d/) and [ɣ] (/g/) is due not to a phonological, but to a sociolinguistic factor; and (2) whether or not it is phonologically well-motivated to set up in general hierarchies of the articulatory strength of consonants.

1.1. 序. 子音の「弱化」とよばれる音変化プロセスとは閉さ音からまさつ音を経て接近音 (approximants) への変化、つまり調音法および有声性の変化のことをいう (cf. Foley [12], Ladefoged [18], Lass [19], Lass/Andersen [20], Hyman [16]). 接近音が脱落する、つまり、ゼロとなる場合をもこの種の弱化に含めることもあるが、脱落は上述の弱化とは必ずしも同じ種類のものではない (cf. Lass [19]). この種の弱化は共鳴音 (sonorants) の間に現われる子音にもっとも起こりやすいが、その他の環境、たとえば末位置でも十分に起こり得る。

「弱化」をこのように規定した場合、セグメントの強さが規定できよう。たとえば、Lass ([19], 17) はセグメントの強さの階層を次のように設定する (大きい数字ほど強い): 6. 妨げ音 (obstruents) [-voice], 5. 妨げ音 [+voice], 4. 共鳴音 [+cons, -voc] (鼻音), 3. 共鳴音 [+cons, +voc] (流音), 2. 共鳴音 [-cons, +voc] (母音), 1. 共鳴音 [-cons, -voc] (わたり音)。強さ 6 および 5 の妨げ音の相対的強さの階層に関しては Lass (ibid.) は次のように分類する: 4. 閉さ音 [-voice], 3. 閉さ音 [+voice], 2. まさつ音 [-voice], 1. まさつ音 [+voice]。ただし、無声音と有声音とでは声門の構えと呼気流、呼気圧のメカニズムが異なるところから前者 ([-voice]) を [+pressure], 後者 ([+voice]) を [-pressure] の階層に分けるのが適当であると Lass (24f.) はいう。この分類は調音法、有声性および共鳴音性を規準とする妥当なものといえよう。

さて、この種の子音弱化は通時的に (そして共時的にも) 種々の言語に起こってきた。特に、唇音、歯音および軟口蓋音についてそういえよう。そこで、これら 3 つの調音点を異にする子音類を、種々の言語における弱化に対する抵抗力の強さ、つまり通時的 (および共時的) 弱化の進行程度

によって、3類の子音の中どの調音点の子音が強いかわかりが論じられてきている。Foley [12]; [13] や Zwicky [26] などは唇音が(調音力)最強、次が歯音で、軟口蓋音が最弱と考えているようである。しかし、これは言語普遍的な順序とはいえないようで、たとえば Hyman [16], Lass [19], Lass/Andersen [20] では唇音以外の歯音とか軟口蓋音が弱化に対してもっとも抵抗する事例が示されている。たとえば Lass は古英語では歯音が弱化に対してもっとも抵抗力があることを例示している。(デンマーク語については後述。)しかし、一般に軟口蓋音が最弱という点では一致しているようであるが、だからといって軟口蓋音が弱化に対して全く抵抗力がないということではない (cf. Hyman (167) の Laganda 語、Lass/Andersen (184) のハンガリア語)。

1.2. デンマーク語子音に関する Foley の解釈: 調音点と調音力の関係についての一般的考察は § 3.3. で述べるが、Foley [12] は唇音が最強である例証の1つとして、デンマーク語閉き音の弱化プロセスを挙げている。(James Foley: “Phonological distinctive features,” *Folia Linguistica* 1970, 4. 87–92 については原論文を筆者はみることができないため、Hyman ([16], 166) の記述にしたがう。) Foley (88f.) はデンマーク語およびスペイン語の子音推移をとりあげているが、デンマーク語については次のようにいう:

“Foley states that intervocalic voiced velars and dentals become weakened, but not labials (at least not until recently): *kage* [kaɣe], English *cake*; *bide* [biðe], English *bite* but *købe* [købe] [‘to buy’, HM], English *cheap*.” (Hyman (166))

[下線は筆者による。この下線の部分はおそらく Foley 自身が述べていることであろうが定かではない。また、デンマーク語単語の母音の発音は現代語では第1音節のそれは長母音、第2音節のものは schwa となる。]

この Foley の記述は正しくない。唇音も歯音や軟口蓋音と同様の変化を経ているのである。つまり、本来(12世紀初頭)の短かい無声閉き音は全て $p, t, k > b, d, g > v, \delta, \gamma$ の変化を経ているのである。Foley がとりあげていると思われる現代標準語の /b/ が [b] であるのは、実のところ調音力の強さという音韻的な要因によるのではなく、いわば社会言語学的要因によるのである。以下、「弱化」の進行の仕方が言語によってかなり異なる例の1つとして、デンマーク語閉き音の変化の概略を述べることにする。

2.1. デンマーク語閉き音の通時的変化: デンマーク語(以下、デ語と略す)の閉き音の弱化は通時的にみてデ語を他のノルド語と区別する顕著な音韻的特徴の1つといわれる。(以下の記述は主として Skautrup [24], Hansen [14]; [15], Brøndum-Nielsen [7], Andersen [2], Brink/Lund [5]; [6] に基づく。)

1100年頃までに多音節語の強勢配分の仕方に変化が起こった。すなわち、強勢の中心が第1音節に置かれるようになったことによって同音節の強勢が強強勢をもつようになったのに対し、第2音

節以下は弱（めの）強勢をもつようになった。この結果、1100年前後（中世デ語初期）から第2以下の音節中の母音が弱化し始めるが、閉さ音の弱化はこの強勢配分の変化および母音の弱化を前提とするといわれる。

いうまでもないが、問題の変化は全ての閉さ音に対し全ての位置で同時に起こったわけではない。閉さ音弱化は強母音後の位置（語中、語末——以下、この位置を「末位」とよぶ）で起こるものであるが、最初は強勢のごく弱い位置とか、（母音後で）l, r, nの前などに起こったし、語中母音間の方が母音後で語末位置より早く弱化した。また、軟口蓋音の弱化が一般にもっとも早く、それから唇音と歯音が弱化した。後2者ではどちらが早く弱化したかは方言によってちがいがあろうである（Brøndum-Nielsen ([7], 89; 91f.)）。

（/p, t, k/ = p, t, k > b, d, g（音声表記の〔 〕は省略）の変化が始まったのは1100年を過ぎた頃といわれ、これに並行あるいはやゝ先行して（/b, d, g/ = b, d, g > v, ð, γ）が始まる（vはβの段階を経たと思われるが、いずれにせよ綴字はこの段階ではb）。その後、1100年代の中頃から1200年過ぎにかけて、まず（/g/ = γ > j/w/φ（ゼロ））が起こり、ひき続いて（/b/ = v > w/φおよび（/d/ = ð > j/φ）の変化が起こった。そしてこれらのj, wは2重母音の第2要素となることによって、音素的に/j-, -w/として既存の/j-, w-/に併合される。一方、本来の/p, t, k/ = b, d, gがv, ð, γに変わったのは上述の/b, d, g/ > j, w/が起こった後であるといわれる（Skautrup (I, 232); Brøndum-Nielsen (92; 149ff.)）。

この結果、1200年を過ぎてからは頭位では/p, t, k/ : /b, d, g/（= p, t, k : b, d, g）の対立があるのに末位では/p, t, k/（?）（= v, ð, γ）しか残らないという不均質な体系となるかのようであるが、実は本来/p, t, k/, /b, d, g/であったものの他に語中および語末では重子音/pp, tt, kk/ および/bb, dd, gg/があったのである。音韻史の記述は本来の/b, d, g/が閉さ音の体系から離れた後の/pp, tt, kk/, /bb, dd, gg/という2列の重子音の状況を明確にしていらないが、Skautrupは1200年代は2列の重子音の対立が保たれていたと考えているようであるし（cf. I, 236f.; 254; II, 48）, Brøndum-Nielsenも同じように考えているようではあるが（cf. 139）, 対立の中和も少なくとも部分的にはあったのではないかと考えているようである（cf. 95）。

いずれにせよ、重子音には次のような変化が起こったといわれる（変化の時期については後述）：（コペンハーゲンのあるシェラン島を含む）島嶼方言では1300年代初頭の一般的「重子音の短音化」によって/pp, tt, kk/ と/bb, dd, gg/ が短音化して中和し、b, d, gとなり、v, ð, γ, すなわち本来/p, t, k/ であったものと対立するようになった。これに対しユトランド方言では/bb, dd, gg/は短音化して本来の/p, t, k/に吸収されて、この中和形が本来の/pp, tt, kk/の短音化したものと対立するところとなった（Skautrup II, 48）。つまり、島嶼方言では

$$\left. \begin{array}{l} /pp, tt, kk/ \\ /bb, dd, gg/ \end{array} \right\} \dots\dots\dots > /p, t, k/ = b, d, g,$$

$$/p, t, k/ \dots\dots\dots > /b, d, g/ = v, ð, \gamma,$$

/b, d, g/ > /j, w/;

ユトランド方言では

/pp, tt, kk/ > /p, t, k/ = b, d, g,

/bb, dd, gg/ } > /b, d, g/ = v, , γ
/p, t, k/ }

/b, d, g/ > /j, w/

となったわけである。この音素的状況は現在の標準語、諸方言でもほぼ同じである。(b, d, g の推定音価 (Skautrup II, 48) は妥当と思われる。cf. § 3.3.)

Skautrupはこの変化が起こったのは1300—1350年の間で、一般的「重子音の短音化」が起こってからのことと考えているようであるが、筆者の考えでは1200年代に本来の/b, d, g/が閉き音の体系を離れてから後は体系上の均斉の点、/bb, dd, gg/の機能負担量が低かったこと (cf. Ringgaard [21], 310), その他の理由から (有声性については、cf. § § 1.1., 3.2., 3.3 および Lass [19]), 島嶼方言では1200年代にすでに2列の重子音の対立が中和していた可能性があると考えているが、現在のところまとめられないのでこの点は今後の課題としたい。

以上述べたように、唇音も歯音および軟口蓋音と同様「まさつ音化」しているが、その後1300—1450年の間にこれらのまさつ音は諸方言でさらに表1に示すように変化する (スコーネ方言は省略)。なお、§ 2.2.の標準語との関係を示すために (東部) シェラン方言の閉き音体系 (15世紀以後) を示すと、次のようになる:

	頭位	末位
/p, t, k/	b ^h , d ^h , g ^h ,	b, d, g
/b, d, g/	b, d, g,	w, ø, j/w/φ.

表1：本来の/p, t, k/ > /b, d, g/の諸方言における実現形

(Skautrup (I, 230—32), Andersen ([2], 11—13; [1], 341ff. に基づく。) (Φ = ゼロ)

	唇音	歯音	軟口蓋音		唇音	歯音	軟口蓋音
島嶼方言:				ユトランド:			
シェラン	}	ø	{ j/w/Φ (Φ = 狭母音後、 j = 前舌母音後、 w = 後舌母音後)	北ユトランド (北部)	}	β	Φ
ファルスター (南部)				(南部)			
(その他)				東ユトランド (北部)	}	v	ø
メン (中部の小区域)				(東部)			
(その他)				(ラナース付近)	}	b	Φ
フューン		Φ		(オーフス地区)			
その他の島々		Φ		(その他)		j	γ
				西ユトランド		r	
ボーンホルム島	v	d / ø	dj (前舌母音後) g (後舌母音後)	中部ユトランド		ø	
				南ユトランド (北部)	-v-/-f		-γ-/-x
				(南部)	f	r	x
				(最南端)	b		x
				レース島		Φ	
				アンホルト島	w	ø	γ

2.2. 標準語における状況: 以上みてきたように、唇音が歯音および軟口蓋音より“強い”とする Foley の考えは少なくともデ語諸方言の状況にはあてはまらないことになる。一方、Foley が対象としたはずの標準語ではどのようなになっているだろうか。

1300年頃からコペンハーゲン方言（東シェラン方言）を基層とする標準語（らしきもの）が形成され始めたといわれる（Hansen〔15〕, 165ff.）。その後徐々に発達していき、1500年代後半頃からはっきりした形をとり始めたようである。そして、この標準語には比較的口語的なものとフォーマルなものとの区別は行なわれていたようである。

標準語の/b/はシェラン方言のそれに以て、長期間にわたって末位ではv/bの両形が用いられ、語によって通常 v になるもの、b になるもの、両形が用いられるものがあったといわれる（Baden（1735年）の示す口語において〔b〕の代わりに〔w〕が用いられる語: *kåbe*, *råbe*, *køb* (cf. Foleyの例), *løber*, *løb* (Brink/Lund〔6〕, 434); vHansen（1741年）の示す *b* =〔v〕の語: *døbe*, *gæbe*, *hoben*, *labe*, *Ribe*, *skibe*, *vibe*, *løbe*, *abe*, *abekat* (Hansen〔15〕, 170)）。

ここで注意すべきことは、デ語全体にあてはまることであるが、唇音/b/は/d, g/とは異なり、末位でまさつ音化した場合には古くから綴字の方も**b**から**v**（その他 *u*, *ff(u)* など）に変わったということで、その場合通常音素的变化を伴うことである（*blæver*, *blævre*, *dræve*, *drøv*, *hive* etc.）一方、/d, g/はまさつ音表示のために初めの中は *th*, *gh* などの綴りこそ使われたが、新しい文字の導入は行なわれず、現今では（音素的变化を伴う部分的な *j* を除き）再び *d*, *g* に戻っている。（この状況はLass（〔19〕, 20f.）の示す古英語の事情と類以する。）このようなわけで、綴字の点で唇音閉き音の**b**は現代標準語の規範的発音でほぼ〔b〕のみを表わすため、本来の/p/が**b** > v > w という変化を経たのが目立たないということもある。

現代語というかここ100—150年ほどの傾向をみると（cf. Brink/Lund〔5〕,〔6〕; Hansen〔14〕），綴り（および音素）が**b**から**v**に変化したもの（Brink/Lund〔6〕, 434に多数の例あり）は別として、綴字が**b**であるものの状況は次のようである。*kobber*, *peber*, *pebre* では（2重母音第2要素としての）〔w〕が唯一形である（そして、音素的には/v/とすべきであろう）。*kryb(e)*, *køb(e)*, *løb(e)*, *pibe* などでは〔v, w〕形が普通である（〔w〕のときは先行の母音は短かく、全体で2重母音）。その他の綴字**b**（で/b/であるはずのもの）における〔v〕または〔w〕またはその中間音は“古風または俗語的”であるとHansen（〔14〕, 51）はいうが、Brink/Lund（〔5〕, 54;〔6〕, 434ff.）は〔b〕～〔v/w〕の交替発音形をもつ語例を多くあげ、〔v/w〕形は“日常会話体”であるといい、必ずしも俗語的とはいっていない（ついでながら、Hansenはユトランド出身、Brink, Lundはコペンハーゲン出身である; cf. 拙論〔27〕）。以上が標準語における末位の/b/の実現形の状況である。ここではたしかに閉き音発音形（〔b〕）が現われる場合が多いといえよう。

（なお、デ語の〔v〕,〔ð〕の音価であるが、現代（標準）語では〔v〕と〔w〕が対立することはないため〔v〕は下唇の引きが弱く、〔v〕と〔w〕の対立をもつ言語の〔v〕ほどまさつ性が強くなく（Andersen〔1〕, 344）,〔strident〕ではなく〔mellow〕である（Fischer-Jørgensen〔11〕, 159）。また、頭位

[v-] (= /v/) の代わりに[w-]が用いられる方言もある (Andersen, *ibid.*)。現代デ語の[ð]は英語やアイスランド語などの[ð]とは異なり、舌尖は用いず舌端と前舌面の間の部分を歯茎に接近させてつくる音で、外国人にはよく[l]と聞かれることがある (Andersen [1], 345)。対応の[θ]はない。この[ð]も典型的な[mellow]音である。

3.1. 標準デ語における唇音[b]の保持は社会言語学的要因による: §2. で述べたように、本来の/p, t, k/の変化においてデ語では唇音の弱化は歯音、軟口蓋音の弱化と同様に古くから現代に至るまでずっと続いてきた現象であるにもかかわらず、そしてまさつ音化どころか諸方言にみられるように接近音にまで達しているにもかかわらず、あたかもまさつ音化に達しなかったかのようにみられる理由は、1つは綴字そして音素的状況が変化したものがあつたため目立たなかつたこと、もう1つは綴字bで/b/の場合、標準語のみのことではあるが、弱化形発音が“何かの都合で”非標準的またはインフォーマルな発音とみなされてきたことである。決して唇音が強い、抵抗力のある子音類であつたからではないのである。

俗語的、つまり非標準的発音とみなされるという社会言語学的要因がなぜ、どのようにして支配的となつたのかはよくわからないが、人々が音韻的には“自然”と思われるが社会言語学的には、“俗語的” (またはコペンハーゲン方言的(?)) 発音形を避けようと努力したと思われる事実はいくつかある。たとえば、標準語の会話体発音で[b]~[v/w]の交替形の中のいずれか一方が特に現われる語がいくつかある。その傾向がコペンハーゲンとオーフスでは逆の場合がある (Brink/Lund [6], 434)。また、(コペンハーゲン) 標準語でいくつかの、特に文語的表現のための単語ではないのに[b]形のみをもつ語があるが、なぜそうなるのか解せないことだと Brink/Lund (*ibid.*) はいう: たとえば, *dyb* <深い>, *hyben* <ばらの実>, *håb* <望み>, *håbe* <望む>, *læbe* <唇>, *røbe* <あざむく>, *våben* <武器>, *åben* <開いた(adj.)>, *åbne* <開く>。なお, *København* <コペンハーゲン> という語におけるbの発音は1910年生れの人まではフォーマルな言語でも[v/w]形であつたとのことである (Brink/Lund [6], 437)。

以上のようなわけで、/b/の弱화가目立たないのはせいぜいここ100—150年ばかりのことである。(つまり、§1.2. で言及した Foley (または Hyman?) のいう「少なくとも最近までは」という記述は丁度逆で誤りである。)

なお、上述のことは本来の/p, t, k/に関することであるが、このほか本来の/b, d, g/にも/pp, tt, kk/, /bb, dd, gg/にも/p, t, k/に並行の変化があつたことは§2.1. で述べた通りである。

最後に、末位の/b/を[b]とする現代標準語の閉さ音体系を示す:

頭位(=音節頭) 末位(=音節末)

/p, t, k/ [b^h, d^h, g^h] [b, d, g]

/b, d, g/ [b, d, g] [b, ø, γ]

ただし、[ɣ] はごく保守的な言語にのみ現われるもので、現在は[ɣ] > ∅ (狭母音後)、[j] (前舌母音後)、または[w] (後舌母音後) となる。したがって、軟口蓋音/g/の弱化は/b, d/のそれより進行しているといえる。なお、/t/=[d̥]は破さつ音[d̥^s]となることが屢々である。また、末位の[b, d, g]は有声音間では半有声となるのが普通である。

/p, t, k/対/b, d, g/の中、末位で音価が同じなのは唇音のみである。つまり、末位の/p/, /b/ともに[b̥]であるので両音素はこの位置では中和していることになる。しかし、別の考え方もある、/p/と/b/の中和ではなく、末位の[b̥]は(綴字のpもbも)全て/p/の実現形であって、末位の/b/は末位の/v/に吸収され[v]または[w]で実現されるとする考えもある。異音分布の見地からはたしかにそういえないではない。このような異なる解釈が起こるのは唇音の変化プロセスを如実に物語っているといえよう。ただ、主として外来語に関するものではあるが、*mikroskóp* [b̥], *klaustrofob* [b̥]に対する*mikroskopi* [b̥^h], *klaustrofobi* [b̥]のような形態音韻的交替を認めると(cf. Bas-bøll[3], §2.3.4.), 末位では/b/は現われないとはいいいきれない。また、Rischelのいう“consonant gradation”という形態音韻的交替も考慮する必要がある(cf. Rischel[22])。これらの異なる音韻的解釈は各自の方法論と目的(簡潔な音素体系の設定、形態音韻規則の設定等々)によって異なるであろうが、本論ではこれ以上詳述しない。

以上、弱化を促がすあるいは阻止する要因が音韻的なものとは限らない例の1つとしてデ語閉口音の変化の状況を示した。

3.2. デ語諸方言における子音調音力の等級: デ語諸方言における変化をみると、シェラン方言においてもっとも変化がはげしく、ここを中心にして変化が拡がっていったのがわかる(cf. §2.1.)。

本来/b, d, g/であったものは各々/j/, /w/またはゼロに変化した。この中/g/の変化(弱化)がもっとも早かったといわれる。この場合/g/がもっとも弱化しやすい、つまり弱いといえるかもしれない。本来/p, t, k/であったものを島嶼方言にみると、/p/は[w], /k/は[j]/[w]/∅であるのに対し/t/は[ð]またはゼロ(脱落)である。この場合は、/p, k/が接近音に達しているのに/t/はそうでないから歯音は強いことになるのか。しかし、/k/がゼロとなるのは狭母音の後のみであるのに対し/t/の脱落(フーン島ほか)はそのような条件(調音点同化)がつかないのであるから、もし脱落を弱化プロセスに含めるなら、/k/および/p/より/t/の方が弱いということになるのだろうか。/p/は/t, k/とは異なり原則として脱落することがないが、これは唇音が強iからなのだろうか。一方、ユトランド方言では本来/p, t, k/であったものは全体としてまさつ音の段階にとどまっているが(ユトランド方言が保守的であることについては、cf. 拙論[27]), /k/はユトランド全方言で[ɣ]の段階にとどまっているのに対し、/p/は[w]に、/t/は[j]またはゼロになっている方言が散見される。この状況は/k/が強いことに起因するのだろうか。

特にシェラン方言(および標準語)についてのことであるが、現在の/d/ (本来の/t/) は[ð] と

いうまさつ音の段階にとどまっているが、[ð]は接近音と同じ音韻的なふるまいをすることがある。すなわち、[ð]および接近音[j, w, ɹ, ɹ̥]の前の長母音は質はそのまゝで短母音状音化される。(その他の有声子音状音の前ではこの限りではない。詳細はcf. 拙論[28], [29]。)

(ついでながら、現代(標準)語の歯音[d^h, d, ð]は調音的には左から強さが弱くなるといわれる。たしかに声門の構えでは[d^h]と[ð]の相異がもっとも大きく、[d]はその中間である(cf. Fischer-Jørgensen[10])。したがって、“調音的”には強さが[d^h] > [d] > [ð]の順である可能性は十分にあり。しかし、“音響的には[ð]の方が[d]より強く、かつ長いとFischer-Jørgensen ([11], 163) はいう。)

このようにみていくと、§1.1.で言及したLass, Hymanなどの反例をみるまでもなく、Foley, Lass, その他の主張する子音の調音点に強さの等級をつけるとする説は、Foley自身が例証とするデ語においてさえあまり意味をもつとは思われないし、音韻論における自然性を必ずしも示し得るものではないかもしれない。しかし、弱化和調音力の関係については多くの人がとりあげているのであるから、それはそれなりに理由があるはずである。その点について、次節で検討することにする。

3.3. 子音の調音力の等級——一般音韻的考察: Lass ([19], 23) は古英語の場合調音力の強さは歯音—唇音—軟口蓋音(左端が最強、以下同様)であるといい、この結論はまちがっていないと思うが、同時にFoley[11], [12]やZwicky[26]のいう唇音—歯音—軟口蓋音の順序づけもまちがっているとは思われないといっている。筆者も同意見である。つまり、完全に言語普遍的な順序づけはできないということになるわけであるが、なぜ上述の2つの異なる順序づけが提議されるのであろうか。いずれにせよ、彼らの目指すところは音韻規則の自然性と思われる。このことは非常に重要なことであるが、それを行なう際に音声的事実を多少ないがしろにしているのではないだろうか。この点を検討してみようと思う。

唇音が最強というより、唇音がもっとも子音らしい子音、つまり、母音(その中、特に開口/A/)からの調音的距離がもっとも遠いということはRoman Jakobsonがずっと続けてきていることである。円唇性という二次的な特徴(Jakobsonの音調性素性)を今除外して考えると、唇子音では舌は調音に全く関与しないが、母音の方は舌の動き、すなわち位置によってその特徴が決定される。したがって、唇子音と母音の調音法は舌の使用に関して最大限に異なる。

一方、歯音が‘最強’と考えることもできよう。なぜなら、Chomsky/Halle[9]の素性でいえば、唇音と軟口蓋音は[−cor(onal)]で、[+cor]の歯音と対立し、母音は定義上または余剩的に[−cor]であるからである。(また、唇音と軟口蓋音はJakobsonの[+grave]という特徴をもつが、これはたしかに重要な特徴と思われ、Ladefoged[18]も主として聴覚的見地からとはいえ、この[grave]という素性を捨てきれずにいる。)

ところで、Lass/Andersen ([20], 186) は次のようにいう。Chomsky/Halleの設定する coro-

nalityという素性は子音を特定化するには説明力があるが母音に対してはそうではない。たしかに唇音、軟口蓋音および母音から成る音類を設定できるかもしれない。そして、coronalityは妨げ音に対しては弁別的であるが母音に対してはそうではないといえるかもしれないが、それでも coronalの妨げ音が強いとか、あるいはnoncoronalの妨げ音が弱いことを説明できない。もし唇音と軟口蓋音が音韻的に有意義な1音類を形成するとするなら、それを定義する何かもっとポジティブな素性が要求されよう。そしてその素性は全ての母音が（余剰的に）分有する素性であってはならない。以上のようにLass/Andersenはいう。一般にcoronalityが母音（に関する規則）に対して余剰的な素性であることはたしかであろうが、調音点と調音力の関係を問題にする場合、少し異なる角度からみることができると思われる。

子音の「弱化」とは本質的には母音からの調音的距離の問題である（ただし、有声性も必然的に関連する）。そこで、§1.1.で言及したLassの強さの異なるセグメントをいくつかの段階に分けて考えてみよう。まず、調音力のもっとも強いとされる無声閉さ音は声門が積極的に開放状態になっているはずであり、口腔閉さによって口腔内気圧ももっとも高いはずであるので、もっとも有声になりにくい音であろう（cf. Berg[4], Catford[8], Fischer-Jørgensen[10], Ladefoged[18], Sawashima[23]）。したがって、無声閉さ音は有声共鳴音の母音からは調音生理的にもっとも遠い音類である。そこで、調音法および有声性の点で無声閉さ音に関するかぎり、調音点のちがいによる強さのちがいはないのではないかと筆者は考える。有声閉さ音については何ともいえないが、有声音である点は重要なことで、その点で後述のまさつ音の方に近いかもしれない。

次に、子音（〔+cons〕）と母音の調音点の対応をみると、硬口蓋位置が前舌母音の位置だとすれば、それより前寄りの調音点は子音のためのみということになる。したがって、唇、歯（茎）、軟口蓋の妨げ音の中で調音点および用いる舌の部分（つまり、受動的上部口腔との間のせばめまたは閉さを形成するために用いられる舌の部分）は変えずにせばめだけを変えて接近音になり得るのは軟口蓋音だけである。このかぎりにおいて軟口蓋子音が「弱化」との関連では最弱となる可能性は十分にあるわけである。

調音位置と舌の関係をもう少し詳しくみてみよう。妨げ音の中、唇音（〔p, b, f, v, Φ , β 〕）では舌の位置は一切問題とならない。また、唇の形（調音点ではない）は通常平唇であるが、いずれにせよ平唇と円唇の対立はない。（これは〔m〕についてもいえる。）〔f, v〕は唇歯音であるが、この場合も円唇性および舌の位置は関係しない。歯音（〔t, d, θ , δ , (s, z)〕）は唇音とは異なり舌が調音に関係するが、用いられる舌の部分は舌端または舌尖である。一方、母音は本質的に舌端も舌尖も用いることはない。軟口蓋妨げ音（〔k g x ɣ〕）は前述のように奥舌をもち上げて軟口蓋との間のせばめ（または閉さ）をつくることによって形成され、その際用いられる舌の部分は後舌狭母音における場合と本質的には同じである。したがって、母音の本質的特徴が舌体（body of tongue）の位置によって決定されるとするなら、唇音は舌を用いないこと、歯音は母音形成の場合とは異なる舌の部分を用い、異なる調音点をもつことから、両子音類とも母音からの距離は遠いことになる。そして、

唇音は舌を一切用いないのであるから母音からもっとも遠いといえよう。

まさつ音から接近音への変化 ($v > w$, $\gamma > w$) の場合をみる。 $[w]$ の調音点が唇か軟口蓋かはむずかしい問題で、それ故に $[w]$ は“唇軟口蓋音”といわれる。たしかに $[w]$ は円唇 ($[+round]$) の音といえようが、もし円唇性のみが特徴であるならば $[w]$ は形成されない。 $/w/$ の実現形の円唇性の強さは言語によって異なるであろうから (たとえば日本語とフランス語)、その本質的特徴はむしろ Chomsky/Halle の素性でいって $[+high, +back]$ であること、つまり、舌体が調音に積極的に参加するところに接近音としての特徴があるわけであるから、その点では $[w]$ は唇音とはいいがたい。 $[w]$ ($= [u]$) が円唇であるということに意義があるのはたとえば (非音節な) $[m]$ とか $[i]$ とかの平唇音が存在するときであろう。そこで、少なくとも「弱化」に関連しては $[w]$ の特徴の中心は舌体の位置 ($[+back, +high]$) にあると筆者は考える。唇音の $p > b > v > w$ のような弱化プロセスはたしかに順次起こり得るプロセスであろうが、 $p > b > v$ のような妨げ音におけるプロセスは舌の位置および円唇性が関係しない点で w とは異なるのであるから、 v と w の距離は b と v のそれと同じではない。その点で、 $p > b > v > w$ を唇音 (変化) としてまとめて扱い、唇音が強い調音点の子音か否かを決定しようとするところに無理が生ずるのではないだろうか。(ただし、頤筋その他の筋束の収縮活動が唇音および軟口蓋円唇母音、半母音に共通する可能性はある。) 同様のことが $\delta > j$ (たとえばデ語方言) や $\gamma > j$ にもいえよう。

上述のように、妨げ音と接近音 (共鳴音) には大きなちがいがあるので、調音点の相異による調音力のちがいを問題にしたい場合は妨げ音だけに限って問題にしたらどうであろうか。そして、強さのちがいを決定しようとする場合には調音点のみではなく、舌を用いるか用いないか、用いるとすればどの部分かといった多価の素性を設けることも考えられる。

唇音の円唇性に関連のあることで、Lass/Andersen ([20], 185f.) は Lee (1971) の示す15世紀朝鮮語の母音円唇化に言及し、 $/m, p, ph, k, kh/$ の前で $/i/$ が $[u]$ に変わる場合をとりあげ、唇音の前での母音円唇化は“自然”であるが軟口蓋音の前では自然とはいえないという。はたしてそうであろうか。 $/m, p, ph/$ は筆者の考えでは前述のように円唇音ではない。 $/k, kh/$ も同じである。したがって、唇音の前でも軟口蓋音の前でも母音の円唇化は自然ではない。しかし、一般に $p > b > v > w$ のようなプロセスが予想されるところから、当該朝鮮語の唇音に (余剰的に) 円唇性があるとするなら、 $k > g > \gamma > w$ のような一般的プロセスから予想される軟口蓋音の円唇性も同様にあり得よう。したがって、問題の閉き音 (および鼻音) では唇音にも軟口蓋音にも同じ程度の円唇性または非円唇性を認めることによって、両調音点の子音の前での母音円唇化が自然であるということもできるし、逆に自然ではない (つまり、他の要因による円唇化) ともいえると筆者は考える。

以上まとめてみると、まさつ音の段階まででは、調音点および用いる舌の部分の尺度とした場合軟口蓋音が母音 (接近音) に調音的距離がもっとも近いので、調音的にもっとも“弱化”しやすいであろう。まさつ音から接近音への変化においては、もし w の舌の位置ではなく円唇性を重視してこれを唇音とするなら、そしてもし歯音の舌端を用いる調音を変えないならば (cf. $\delta > j$)、歯音は母

音との共通性をもっとも少ないことになるので、母音からもっとも遠い、つまり、（もっとも“強い”調音点の子音というより）もっとも子音らしい子音ということになる。Troubetzkoy ([25], 135)によれば、歯子音をもたない言語はないとのことである。したがって、Lass/Andersen のように coronality という素性は母音に対してはネガティブな素性というなら、唇子音の円唇性もネガティブといえるであろう。一方、coronalityを調音点および舌の使い方によって規定されるような素性と考えることにするとしたら、これは歯子音に対してと同様母音および軟口蓋子音に対してもネガティブとはいいきれない。

いずれにせよ、子音の「弱化」を母音からの調音的距離の函数とみた場合、「弱化」という術語は適当ではなく、せばめに関する「開口化」とすべきであろう。

4. まとめ：本論でとりあげてきた子音の調音点と調音力の関係あるいは等級は言語普遍的とはいいきれないことはたしかである。また、これらのことはどのように定式化しようと、どのように有標化しようと、あくまでもいわゆる‘substantive language-universals’の問題である。

生成音韻論がそれ以前の構造言語学的音韻論にくらべ、理論の上でも方法論の上でも進歩した点が多々あることはあらためていうまでもない。しかし、あまりにも形式性を重んじ、そして基底形から表層実現形への方が唯一の正しいものだと考える（ことを余儀なくされる）ところから、実現形の正確な音価をないがしろにする傾向があり、そこから自然とはいえない規則が設定されることが屢々ある。自然音韻論という立場は、形式性、説明力のある規則定式化を追求しながらも実質にも目を向けているという点で健全な方向にあるといえようが、それでも、たとえば、デンマーク語閉さ音の変化における社会言語学的要因などを無視して、すべての変化あるいは規則が（形態）音韻的動機に基づくと考えてしまう性急さはよくない。また、Lass/Andersen[20]の朝鮮語母音の円唇化に関する自然性の考えも適切とはいえないと思われる。いずれの場合も、既に設定されている素性だけに頼らず、実現形セグメントのより詳しい音声的特徴を考慮して、必要なら新しい素性を設け音韻規則を設定する必要があるだろう。これはいわゆる“detail-rules”のための言語特定の音声記述のことをいうのではない。たとえば、調音的素性に関してはEMG（筋電図法）などの研究成果に基づく新しい素性の設定などによって、将来はもっと自然な規則の設定が可能となるかもしれないというようなことである。その意味でLadefoged[18]のようなアプローチがもっと多く現われることが望まれよう。ただ、問題を「弱化」だけに限ったとしても、調音的に定義される素性だけを用いて真相を解明できるか否かは疑問であろう。音響的および聴覚的素性、とくに後者に対する配慮がもっと必要であろう。

アメリカ構造言語学の音韻論というより音素論は方法論としては広義の意味の排除とか二方向唯一性などいくつかの（根本的）問題点はあるにしても、実さいに多くの未知の言語を記述したという大きな実績がある。そして、実質から形式へ向うという“聞き手”の文法からのアプローチは興味深くかつ貴重なものといえよう。形式から実質への“話し手”の文法記述が可能なら、逆の方向

からの記述も可能のはずであり（現実には我々は時に応じてどちらの方向からも接近しているのだが）、実質からのアプローチを目指すことによって、少なくとも音韻論の部門ではセグメントの正確な記述に注意力を怠らないようになるのではないと思われる。生成音韻論では音素の存在を認めないということが問題とされることがあるが、極端ないい方を敢えてすれば、このアプローチは今のところ音素の記述の段階にとどまっていて異音の記述にまでは達していないように思われる。

(Aug. 77)

参考文献

- [1] Andersen, Poul : *Dansk Fonetik*, Copenhagen 1954.
- [2] Andersen, Poul : *De danske Dialekter*, Copenhagen 1969.
- [3] Basbøll, Hans : *Konsonanter (i dansk rigsmål, fonologisk set)*, Copenhagen 1973 & 1974 (mimeographed).
- [4] Berg, Jw. van den : "Mechanism of the larynx and the laryngeal vibrations," B. Malmberg (ed.) : *Manual of Phonetics*, Amsterdam 1968, 278-308.
- [5] Brink, Lars & Jørn Lund : *Udtaleforskelle i Danmark*, Copenhagen 1974.
- [6] Brink, Lars & Jørn Lund : *Dansk Rigsmål*, Copenhagen 1975.
- [7] Brøndum-Nielsen, Johs. : *Gammeldansk Grammatik i sproghistorisk Fremstilling*, Bd. 2, Copenhagen 1932 (1957).
- [8] Catford, J. C. : "The articulatory possibilities of man," B. Malmberg (ed.) (cf. [4]), 309-333.
- [9] Chomsky, Noam & Morris Halle : *The Sound Pattern of English*, New York 1968.
- [10] Fischer-Jørgensen, Eli : "Voicing, Tenseness and Aspiration in Stop Consonants, with Special Reference to French and Danish," *Annual Report of the Institute of Phonetics, University of Copenhagen*, Vol. 3, 1968, 33-54.
- [11] Fischer-Jørgensen, Eli : *Trends in Phonological Theory*, Copenhagen 1975.
- [12] (Foley, James (1970), 本文 § 1. 2. をみよ).
- [13] Foley, James : "Rule Precursors and Phonological Change by Meta-Rule," R. P. Stockwell & R.K.S. Macaulay (eds.) : *Linguistic Change and Generative Theory*, Bloomington 1972, 96-100.
- [14] Hansen, Aage : *Udtalen i moderne Dansk*, Copenhagen 1956.
- [15] Hansen, Aage : *Den lydlige Udvikling i Dansk : 2. konsonantismen*. Copenhagen 1971.
- [16] Hyman, Larry M. : *Phonology : theory and analysis*, New York 1975.
- [17] Jakobson, R. & M. Halle : "Phonology in relation to phonetics," B. Malmberg (ed.) (cf. [4]), 411-449.
- [18] Ladefoged, Peter : *Preliminaries to Linguistic Phonetics*, Chicago 1971.
- [19] Lass, Roger : "Boundaries as obstruents : Old English voicing assimilation and universal strength hierarchies," *Journal of Linguistics*, Vol. 7, 1971, 15-30.
- [20] Lass, Roger & John M. Andersen : *Old English Phonology*, Cambridge 1975.
- [21] Ringgaard, Kristian : "bb-dd-gg," *Studier i dansk Dialektologi og Sproghistorie tilegnede Poul Anderson*, Copenhagen 1971, 305-311.
- [22] Rischel, Jørgen : "Consonant gradation : a problem in Danish phonology and morphology," *Proc. Intern. Conf. Nordic and Gener. Ling. 1969*, 1970, 460-480.
- [23] Sawashima, Masayuki : "Laryngeal Research in Experimental Phonetics," T. A. Sebeok (ed.) : *Current Trends in Linguistics*, Vol. 12, The Hague 1974, 2302-2348.
- [24] Skautrup, Peter : *Det danske Sprogs Historie*, Bd. I, Copenhagen 1944 (1968) ; Bd. II, Copenhagen 1947 (1968).
- [25] Troubetzkoy, N. S. /J. Cantineau (trad.) : *Principes de phonologie*, Paris 1949 (1964).
- [26] Zwicky, Arnold : "Note on a Phonological Hierarchy in English," Stockwell/Macaulay (eds.) (cf. [13]), 275-301.
- [27] 間瀬英夫 : 「デンマーク語の /r/ 一標準(口)語とは何か」, 大阪外大「学報」第30号、1974、61-71.
- [28] 間瀬英夫 : 「デンマーク語の母音一量と質の関係について」, *Idun* 2, 1974, 3-36.
- [29] 間瀬英夫 : 「デンマーク語の長・短母音一母音音長は後続子音の数から予測できるか」, *Idun* 3, 1976, 3-34.